反天皇制運動
Alert
31号
［通巻413号］
2019年
1月16日発行
第Ⅹ期・反天皇制運動連絡会

今年は、1919年に朝鮮全土で闘われた「3・1独立運動」から100年にあたる年だ。1910年の「韓国併合」を経て、ますます苛烈になる日本の植民地支配に抗して、民衆が「朝鮮独立万歳！」を叫んで、全土にくり広げた闘いで、その後の抗日闘争の土台となった運動だ。

ぼくがこの闘いでいちばん好きな点は、「独立宣言」に署名した33名のうち、その発表に立ち会った29名（4名は会場に来なかったらしい）は「朝鮮独立万歳！」を三唱したあと、すぐに総督府の警務に自首してしまった。にもかかわらず、その「マンセー（万歳）」という声は、そこに集まった数千人のココロに確かに伝わり、人と人が目で合図を送るように、またたく間に全土に響き渡った、ということだ。ぼくが韓国で見たマダン劇でも、そうした民衆の、草のざわめきのようなシーンがたくさんあった。

「私たちは100年の時間を飛び越えました」。昨年の3月1日に文在寅大統領が言ったことばだ。99年前の、人々のあいだに響いた声は涸れずにあったのだろう。こんどは「1700万個のロウソクが、もっとも平和で美しいすがたでこの歴史を広げて見せた」と。ムンさんの言葉にはいつも、自分もまた、たくさんの人と同じように歴史の最前線に立ってる、という意志を感じる。自分の言葉を聞く人々を信頼してるんだなあ。また、そういう耳を持つ人が文在寅大統領のコトバを引き出してもいるのだろう。（ちょっとホメすぎ？）

ぼくらは、どうひいき目にみても一周遅れの気はするけど、同じ歴史の最前線に立っているのは間違いない。お互いの「経験と記憶」を照らし合わせて、（カレンダー上は）天皇誕生日のないこの1年を、また一年、もう一年と続けていきたいと思う。今年も、よろしく。　（池内文平）

今月のAlert
◉天皇主導であってもなくても、天皇「代替わり」反対だ！　頑張ろう！――＊2
反天ジャーナル◉――吉三、おわてんねっとTwitter担当、映女＊3
状況批評◉天皇の「代替わり」で私たちに押し付けられるもの――皇室イメージと「家族」のあり方――山口智美＊4
ネットワーク◉集会・デモくらい自由にやらせろ！実行委員会――藤田五郎＊7
書評◉『検閲という空気―自由を奪うNG社会』アライ＝ヒロユキ――蝙蝠＊8
太田昌国のみたび夢は夜ひらく〈103〉
◉精神的な葛藤や模索の過程を欠く「紋切型」の言葉――太田昌国＊9
マスコミじかけの天皇制〈30〉◉〈象徴天皇教〉とは何か？
――〈壊憲天皇明仁〉その28――天野恵一＊10
野次馬日誌＊11　集会の真相＊14　反天日誌＊16　集会情報＊16

250円
●定期購読をお願いします（送料共年間４０００円）
●郵便振替　00140-4-131988　落合ボックス
東京都千代田区神田淡路町1-21-7 静和ビル2A　淡路町事務所気付　落合ボックス
TEL/FAX 03-3254-5460　URL http://www.ten-no.net/mail: hanten@ten-no.net
●以前の情報はこちら▶ http://hanten-2.blogspot.jp/

今月の Alert

天皇主導であってもなくても、天皇「代替わり」反対だ！　頑張ろう！

天皇の誕生日であるというだけで「祝日」とされていた一二月二三日は、今年から「ただの日」になる。昨年のこの日、反天連は例年どおり、明仁の「誕生日」を祝わない意思表示とともに、天皇制の問題を考えるための討論集会を開催した（集会報告参照）。そして、いよいよ「代替わり」本番の年が始まった。年明け早々から話題には事欠かないが、天皇の誕生日記者会見に触れないわけにはいかない。

明仁は、二〇一六年八月のビデオメッセージ同様、象徴の意味づけを自ら規定し、憲法が定める「国事行為」以外の行為を、「象徴としての行為」として正当化する発言をくり返すなど、実に多くを語った。これらについては私たちも繰り返し批判してきているので、ここでは以下三点に触れておきたい。

天皇が皇后を慮る言葉のなかに「自らも国民の一人であった皇后が、私の人生の旅に加わり、（中略）皇室と国民の双方への献身を、真心を持って果たしてきた」というくだりがある。天皇一族は「国民」ではないという認識である。では一体何者であるのか。皇統譜に連なる者は「国民」ではない、という判断は成り立つ。しかし、皇統譜に入った美智子も、「皇室と国民の双方への献身」との表現からは、皇室に献身する立場にあるように読める。憲法には皇族の位置づけは何一つ触れていないし、皇室典範でも、天皇を支える一族としての位置が見えてくるが、何の規定もない。しかし、「国民」を超えた特別の存在であるというのが一般的な認識だろう。この特権的非国民たちについて、今さらだが、少し考えていく必要があるように思う。天皇予備軍と天皇予備軍をつくり出す血縁関係にある一族。その特別扱いの根拠はいったいどこにあるのか。合理的な判断ではたどり着かない何かに至るのではないか。

また、天皇は「平成が戦争のない時代として終わろうとしていることに、心から安堵している」とも語った。明仁天皇は日本が戦争に向かう時代に即位した。戦地への派兵と戦争法の乱立と、武器商人の台頭と、日本は過去の戦争の清算もできないまま、同盟国米国の戦争に加担し続けてきた。そして裕仁が最高責任者であった日本の侵略戦争被害国によってその責任を新たに追及されるさなかに退位する。どこが「戦争のない時代」なのだ。これは天皇がピンぼけなのではなく、「この戦争は平和である」という、明仁の最後のメッセージ、とてつもなく政治的発言として捉えるべきだろう。

そして、最後にもう一点。明仁は会見の最後にこのように述べた。「来年春に私は譲位し、新しい時代が始まります」と。「退位」も「譲位」もなかった戦後象徴天皇制に、明仁が「皇室典範特例法」をつくらせ「退位」を認めさせた。しかし天皇は、その「退位」ではなく、「譲位」という言葉を使った。このことの意味を無視しない方がいいだろう。

皇位継承は天皇の意思ではなく制度（皇室典範）にしたがってなされる。だが「譲位」には、天皇の意思で皇位を後継者に譲り、「退位・即位」が行われるというニュアンスが加わる。実際、現実はそうなのであり、その現実をそれとして表現する言葉をわざわざ使って見せているようにしか見えない。

12・23の集会で、私は問題提起者の一人として、徳仁世代に皇室の自律をめざす言動が目立つこと、それが現天皇にも影響を及ぼしているのではないか、と提起した。そのときにこの明仁の言葉を、問題提起から取りこぼしていたので、ここで追記しておきたい。

さらに明仁は、「譲位」によって新しい時代が始まるとも述べている。メディアもよく使う表現だが、新天皇即位とともに新「元号」を制定し、天皇在位期間を一つの時代とすることを「伝統・文化」とすることに、天皇自身が価値付与し、社会的認知を迫る演出ともとれるのだ。

その新「元号」は、公表時期を四月一日に閣議決定し、同日公表という方針を、安倍は一月一日に報道させた。紆余曲折の裏話はメディアにも出ているが割愛。反天連も参加して行った「元号はいらない」署名は、一二月五日、内閣府に提出してきたが（集会報告参照）、短い期間で六八〇三筆。反対する人はいるのだ。また、「大嘗祭違憲訴訟」も一〇日に提訴され、第一回口頭弁論も来月には始まる予定。二次原告の募集も始まった。さまざまな反「代替わり」闘争がすでに開始されている。反基地、反戦、反差別、反安倍の闘いと繋がりながら模索していきたい。情報お見逃しなく、参加・ご協力を。

（桜井大子）

反天ジャーナル

「天皇誕生日」が消えた?

新しいカレンダーを見ていた人が「あれっ、一二月二三日、休みじゃないの?!」「何で〜?」と数人が一斉にのぞき込む。若い人にとってはイブの前の休みは貴重らしい。振替休日で連休になることも多いしね。

正月休み明け、まだのんびりした職員室の昼休み。「もう天皇誕生日じゃないからね」と私。「天皇誕生日無くなるんですか?」と若者。「天皇が変われば誕生日も代わるよね」「嘘〜。今度はいつ? けど、昭和の日って前の天皇の誕生日じゃなかったっけ?」「今度は二月だけど今年は無し。生前退位だから『平成の日』は無いよね。」「生きてると休みにならないんですか〜?ショック!」

なんともはや、の会話だ。

かつては「天長節」と言われた天皇誕生日。国家神道と結びつき、教育勅語発布（一九九〇年）の翌年、小学校祝日大祭日儀式規定が制定され、天長節を初めとした天皇の祭日には登校し、「日の丸」を掲揚し、「君が代」を歌い、教育勅語を唱和した。侵略戦争へ進む国家主義・軍国主義教育の要となった。祝日の中に現在も色濃く残る天皇の祭日、そして改元で体感する天皇による時間の支配。道徳が教科になって、またぞろ復活する教育勅語の精神……。

こいつぁ春から縁起が悪ぇぞ。（吉三）

反天ツイッターをやっている

「おわてんねっと」のアカウント名で、ツイッターを昨年一〇月から運用している。二ヶ月半でフォロワーは四〇〇名を超えたところ。どれほど波及力があるかは分からないが、とにかくこれは意味のある活動だという手ごたえはある

▼まず、反天皇制の人々の意外な「多さ」にビックリする。肩の荷がグッと軽くなる。年始の『東京新聞』の世論調査では、「天皇制廃止」の人は「3・6％」と過去最低（?）を記録したが、それでも四〇〇万人はいるということは、やはり本当だったようだ

▼天野さん達がシコシコ作ってるパンフとか、反天連の討論会のエッセンスとか、警察や右翼相手のこれまで「街頭で稼いだ」内容などを一四〇字に凝縮してせっせと流す。正直、かなり頭を使う作業だが、要点を絞るのは意味あることである。そんな短い字数でも、核心に迫る議論になることもある

▼私らはさしずめ反天皇「集会・デモ派」ということだろうが、おそらく、「そういう風」には活動していないだろう人もかなりいる。だがこの国で、それぞれの生活や活動の中で、悔しい思いをしたり孤立したりしながら天皇制に反対し続ける人々の営為のなんと尊いことだろう。

WEBで閲覧だけでもできます。ぜひ!

（おわてんねっとTwitter担当）

映画"Bohemian Rapsody"

ロックグループ、クイーンの伝説的なヴォーカル、フレディ・マーキュリーの生涯を中心に描いた映画「ボヘミアン・ラプソディ」が世界的な大ヒット。米アカデミー賞の前哨戦とも言われるゴールデン・グローブ賞で作品賞と主演男優賞のダブル受賞。

日本でも映画のヒットはとどまるところを知らず、老いも若きも女性たちが劇場に足を運んでいます。

映画は一九八五年伝説のライブ・エイド、アフリカの飢餓救済のコンサートで幕開け、21分間の演奏で終わります。エンドロールでは、フレディの姿も。

メンバーのブライアン・メイ（天文学博士、辺野古の海を救えとも）とロジャー・テイラーが映画の音楽を担当。構想一〇年というだけあって映画は完成度が高い。圧巻はなんといっても最後、フレディの歌とパフォーマンス!

クイーンを世界のバンドに育てたのは、日本の少女ファン。業界の仕掛け人、東郷かおる子さんはデビュー間もないバンドを日本に招きます。一九七五年初来日、空港に数千もの少女ファンが押し寄せ大混乱。フレディの何が日本の少女たちを熱狂させたのでしょうか。「ミーハーは素敵な合言葉」（東郷さん）。ペルシャ系インド人でゲイというフレディの摩訶不思議な魅力、彼の艶やかな着物姿をご覧!

（映女）

天皇の「代替わり」で私たちに押し付けられるもの
――皇室イメージと「家族」のあり方

山口智美（文化人類学／フェミニズム）

私は普段はアメリカのモンタナ州に住んでいるのだが、年末からお正月にかけては東京の実家で冬休みを過ごした。普段は見ない日本のテレビをよく見たが、「平成最後の」「平成を振り返る」云々というフレーズが溢れかえっていた。「平成」で時代を区切る意味など本来全くないわけだが、それが自然なこととされており、そのことになんらかの感慨を感じて、それを共有して盛り上がるのが「日本人」なら当然だとする雰囲気が蔓延していた。

「平成」に過剰な意味づけをするのは、テレビなどメディアだけの現象でもなかった。昨年、執筆者として参加した共著本のチラシ文案には、女性の人権状況が向上していないことに言及する中で、「平成も終わるのに」というフレーズが書かれていた。文句を言ったらその文言は変わりホッとしたが、女性の人権をテーマとする本ですらこんな状態である。こうして、元号やそのベースとなる天皇制が自然なものと感じさせられ、意味づけを強いられる状況が作られているのだろう。

代替わりを巡るメディア狂想曲的な状況からは、天皇制をますます「自然」なものに見せ、人々との距離を近づけようとする権力のあり方が浮かび上がる。今年の12・23集会で、桜井大子さんが皇室とメディアの関係がより近づいていることを指摘していたが、それを聴きながら、私が調査してきた「草の根」保守運動が、皇室の存在をより身近に感じさせる効果を発揮していることを思い出していた。ここではそれに加え「代替わり」で皇室が表現する「家族」や女性の役割がどう変わり、安倍政権が推進してきた「家族」像とどう重なるのかについても考えてみたい。

「草の根」右派が提示する皇室イメージ

私はフェミニストの文化人類学者として、二〇〇〇年代半ば頃から右派の市民運動の調査を行ってきた。こうした研究を始める直接のきっかけは一九九九年の男女共同参画社会基本法の制定や、地域での男女共同参画条例の策定、性教育の実践などを主要なターゲットとした、フェミニズムへのバックラッシュ（反動）の動きだった。特に宗教右翼勢力や保守系の地方議員らの調査を行ってきたが、二〇〇〇年代中頃から、排外主義の動きが活発化したため、在特会などの調査も始めた。

それ以降、参加者は自身を右派とは認識していなくても、そうした傾向が強いリーダーが率いる勉強会や奉仕活動、あるいは半ば強制的に参加させられる「研修」などの「草の根」活動に関わる人たちなどの調査も行ったが、清掃活動に大きな意義を感じている人たちがいることに気づいた。靖国での野外やトイレなどの清掃や、皇居の清掃奉仕について妙に熱く語られることが何度かあったのだ。靖国での掃除には実際に参加してみたが、「神聖な場所のためか日頃の掃除以上に心が浄化された」的な参加者の感想が多かった。皇居清掃奉仕については、女性たちが、何よりもありがたい機会として語るのを何度か聞いた。また、「古事記」の勉強会を行うグループでは、勉強を通じて、天皇制がいかに「正しく」「崇高」で、日本特有の素晴らしい伝統かという印象が高められていた。

それに「教育勅語」を暗唱したりが加わることで、あらゆるところに天皇制崇拝につながる仕組みが張り巡らされている感じだった。

そんな様々な「草の根」右派の活動を見る中で、私が最も脅威を感じた活動の一つが「竹田研究会」だ。旧皇族で「明治天皇の玄孫」を名乗る作家の竹田恒泰が講師となり、全国で連続講座を開催している団体である。二〇〇八年に発足し、現在は全国一七箇所に支部がある。公式サイトでは「日本を楽しく学ぶ場所」を提供することを趣旨とすると書かれている。私は東京と大阪での研究会に複数回参加したことがあるが、平日夜の開催で、参加費二〇〇〇円（学生は無料）と比較的高いにもかかわらず、参加者は毎回約二〇〇人はおり、年齢層は学生から高齢者まで幅広く、性別にも偏りがない（地域によっては、日本青年会議所（JC）の支部などを巻き込んで動員している場合もあるという）。講座の内容は、時事問題や歴史問題が主ではあるが、「古事記」の解説や、皇室関係のエピソードも多い。話の内容は単純で、聴きながらノートを取る人もいないが、寝ている人もおらず、頷いている人たちもかなり多かった。実際、竹田の話に繰り返しが多いこともあり、ノートを取らなくてもかなりの部分が印象に残り、内容を覚えてしまう。竹田の話術と、テレビ有名人であること、さらに旧皇族を名乗ることでの権威などが相まって、参加者にとって「楽しく学ぶ」場になっているのだろう。皇室についての話が「楽しく学ぶ」ことを銘打つ空間で消費され、ますます身近なものに感じさせられる効果を発揮しているのだ。

昨年夏、久しぶりに私は東京での竹田研究会に行った。印象的だったのが、以前は笑いを取るためのネタが、例えば竹田がテレビで共演するフェミニストの田嶋陽子の（竹田の視点からの）トンデモ発言だったりしたものが、その回は眞子との「婚約」問題を抱える小室圭が笑いのネタになっていた。小室の話題は何度も繰り返し取り上げられ、その度に観客から大きな笑いが起こっていた。小室やシングルマザーの母は「皇室にふさわしくない」存在とされ、スキャンダルが笑いのネタとして消費されることで、逆により皇室を、特別ではあるが、同時に身近なものでもあると感じさせる効果を発揮しているように見えた。

だが考えてみれば、わざわざ竹田研究会に行かなくても、小室圭問題は日々ワイドショーや週刊誌を賑わしている。秋篠宮と紀子夫妻は困っている親として描かれ、当事者である小室や眞子の意思は二次的なものとされ、何らかの決断を下すのは秋篠宮であっても当然だというメッセージも発信されている。つまり「婚姻は、両性の合意のみ」に基づく憲法二四条の規定などは無視されて当然なこととして日常的にメディアが流している状況になっているのだ。

代替わりで打ち出される女性・家族像

「代替わり」で徳仁が天皇になることにより、皇室が打ち出す「家族」像はどうなっていくのだろうか。

今までは死ぬまで現役であり続けた「家父長」の天皇が、今度の「代替わり」では引退して、徳仁が家父長＝天皇に就任する。リタイヤした祖父母、新たな家父長としての父とその母、その子どもたち、という家族像は、安倍政権にとっての理想の「三世代家族」と重なる。

安倍晋三は、二〇〇〇年代半ば、男女共同参画へのバックラッシュを牽引する役割を果たした。その後、二〇〇六年に首相になった安倍は、二〇〇六年一二月に行った教育基本法の改悪の中で新たに第一〇条「家庭教育」の項目を導入した。それにより、二〇〇七年度から「家族の日」を導入し、家庭教育関連施策が文科省や自治体で推進されるなど、「家族」を強調する政策が展開されていった。

二〇一二年一二月に発足した第二次安倍政権以降は、「アベノミクス」の経済成長戦略として「女性の活躍」が掲げられた。だが同時に、自民党の改憲草案の二四条は「家族は、社会の自然かつ基礎的な単位として、

尊重される。家族は互いに助け合わなければならない」という条文が加えられたり、「婚姻は、両性の合意のみに基づいて成立し」という現行憲法の「のみ」部分が削除されるなど、その反動性が明らかなものとなっている。すなわち、先祖から子孫に至る「縦のつながり」を重視する「家族」を社会の基本単位とし、さらに婚姻も当事者以外の第三者の意思が入り込む余地を作るものとなっているのだ。経済戦略としての「女性活躍」と、イエ制度的な「家族」観が矛盾もせず共存しているのが、安倍政権の女性・家族政策ということになる。そして、特に少子高齢化が「国難」であると位置付けられる中で推進されるのが「官製婚活」や、「家族の絆」や自助の論理を前提とした三世代同居推進などの政策だ。

三世代で同居こそしていない天皇一家だが、安倍政権が推進する「三世代家族」のイメージは、見事に今後の皇室が体現する家族像と重なっていくのではないか。その新たな「家族」の中では、皇族女性は今まで以上に「活躍」しなくてはならないだろうし、同時に女性は少子化問題の解決に尽力する「産む機械」としての役割や、個人の尊厳は二の次として国のため、家のために「ふさわしい」とされる相手と結婚していく役割を担わされるということは変わらないだろう。

反対の声をあげること

一九八九年の代替わりの時、私は国際基督教大学（ＩＣＵ）の学部生で、交換留学生としてアメリカに行っていた。当時はまだネットもなく、大学寮に住んでいた私は早くても一週間遅れで図書館に来る日本の新聞をまとめて読み、共用のテレビでニュースをたまに見る程度と、日本の情報からかなり隔離されていた。裕仁の死去から代替わりに至る日本の世の中の状況が異様だったらしいと言うことは聞いたが、それを直接的には経験せずにすんだ。

その頃同級生の友人から届いた手紙には、「大喪の礼」の日にもＩＣＵでは通常授業が普通に行われたことが書かれており、それを読んで誇りに思ったことを覚えている。そして私がＩＣＵを卒業した直後の一九九〇年四月一二日に、ＩＣＵのほか、関西学院大学、フェリス女学院大学、明治学院大学のキリスト教系四大学の学長が連名で「即位の礼」関連の一連の行事、特に「大嘗祭」に反対する「四大学学長宣言」を出した。結果、フェリス女子大学学長宅が右翼に銃撃されるという事件も起きた。

今年五月の代替わりの際にも、私はアメリカにいる。だが、ネットがある今回は状況が大きく違い、日本のニュースからは逃れられないだろう。それを考えるとすでに憂鬱だが、日本にいて、一〇連休中にテレビや新聞、雑誌報道の洪水に有無を言わさず晒されるのとはやはり大きく違うのだろうとも思う。そして、私の母校であるＩＣＵは、今や皇室メンバーが通う大学になっている。安倍政権下で、文科省の締め付けも前回と比べて大きいことも予想される今回、果たしてＩＣＵは前回と同様、毅然とした反対の動きができるのか、それとも大学として完全に変質してしまったのだろうか。正直、全く楽観視はできないと思っている。また、他の大学などでも反対の声はあがるのだろうか。

圧倒的な代替わりのお祝いムードが演出される中、それに取り込まれず、明らかにおかしな状況を批判できる動きを作り出していかなくてはならない。いかに黙らず、普段必ずしも天皇制問題に関わっていない様々な運動や個人も含めて、声を上げていくことが今まで以上に重要になると思う。日本の状況のおかしさが、外にいるからこそ見える面もあることだろう。アメリカからも声をあげていきたい。

ぬとわーく NETWORK

集会・デモくらい自由にやらせろ！実行委員会

藤田五郎（同実行委員会）

「新宿区におけるデモの公園使用規制問題」はその後も申し入れ・交渉が継続中である。一連の経緯を報告するとともに、民主主義の根幹ともいえる「デモの自由」に関わるこの問題への注目をあらためて訴えたい。

発端は昨年六月に報じられたニュース（『東京新聞』は一面トップで報道）であった。新宿区が区立公園の使用基準を見直し、デモ出発に使用できる公園の規制に乗り出した（八月一日より実施）というものだ。これまで使用されていた柏木公園、花園西公園、西戸山公園が使えなくなり、区内では新宿中央公園だけになった。主な理由というのが、デモの騒音や交通規制で地域住民や商店、学校、ホテルなどが迷惑を被っているためだという。

新宿区の「（二〇一七年度）公園別デモ出発実績」によれば、総回数は七七件、そのうち駅に近い柏木公園は五〇回。過去五年間の件数の推移でも倍増というほどでもない。そもそもデモに交通規制は当然のこと、「騒音」といってもマイクを使ったコールで訴えることは権利として認められていることだ。当初は「ヘイトデモ規制」と受け取った向きも多い。しかし対象はすべてのデモ。実際にヘイトデモは七七件中一三件に過ぎずヘイトを理由にデモ全体を規制するのはあり得ない。

この決定に対しては、これまで柏木公園を利用してきた多くの団体、区議、弁護士、ジャーナリスト、憲法学者からも抗議の声が多く寄せられた。急きょ結成された「集会・デモくらい自由にやらせろ！実行委員会」は、新宿区に対して責任部局のみどり土木部・公園課に対して申し入れ、交渉の場を要求した。

第一回は九月一八日、区側で出席したのは公園課の課長と係長。今回の決定に際して、具体的にどんな被害がどこから寄せられたのかを問い質すと、あいまいで漠然とした言い方で、各方面から騒音、交通規制で迷惑との苦情が多く寄せられていると繰り返すばかり。新宿中央公園を唯一残した理由も繁華街から離れているから良いと。デモは人里離れたところでやってほしいということらしい。

議事録（六月二七日）によれば、公園課を統括するみどり土木部長が「（デモ参加者が公園に集まることについて）知らない方がかなり集まってくる状況というのは、近隣の方にとっては嫌な状況ではないか」「区民にとってはストレス」「私自身、自分が住んでいる家の近くの公園で、子供もおります」と自治体の責任者として考えられない発言をしている。こうした理不尽な判断基準がまかり通るのであれば、デモの権利などなきに等しい。

九月二九日には、新宿デモと屋内集会（日本キリスト教会館）が行われ、実行委として新宿区に対して撤回を求める闘いを継続することを確認した。二回目の交渉（一一月二〇日）では、規制の根拠とされた町会・商店会の要望書が提出されるより以前（五月一四日）に、総務課長と弁護士が「区立公園におけるデモ出発地としての占用許可について」協議、さらにそれ以前に、総務課、危機管理課、公園課の間でシナリオがつくられていたことが判明した。続く第三回交渉（一二月二八日）には総務課長が出席。総務課長も公園課と同様に、デモ規制について何の疑問も感じず、当然だと思っている。騒音と交通規制で迷惑だと繰り返すので「では祭りや店の宣伝はどうなのか」と問い質しても、「それは問題ない」と居直る。日弁連の会長が懸念を表明している声明についても、「弁護士皆が読んでいるわけでもない」とんでも発言。「総務課長の発言として社会的に問題になるぞ」と追及すると、あわててその場で謝罪・撤回した。ともかくお話にならないレベルなのである。

次回は危機管理課長の出席も求めて日程を調整中（一月一二日現在）だが、ここまでで明らかになったのは、新宿区長や自民党区議の一部、商店会・町内会の顔役らの暗躍を背景に、区の各部署が、まともな検討・論議抜きに、表現の自由を踏みにじる決定を下したことだ。現在、新宿では、東口広場の歩道が「アルタ前」と呼ばれてデモの集合地点として定着しているが、この状況でいつまで続くかは分からない。というのも、豊島、渋谷、千代田、中央など デモではおなじみの各区における規制、さらには屋内施設での政治的テーマの規制も強まってきているからだ。天皇代替わり、サミット、オリンピックという情勢のなかで、進行する表現規制の現状に抗い、共同で反撃する闘いが求められている。

書評

『検閲という空気――自由を奪うNG社会』

アライ＝ヒロユキ（社会評論社、二〇一八年）

蝙蝠（反天連）

前世紀末以降の経済社会状況を表現するとき「失われた〇〇年」という呼び方が定着している。それは一〇年から二〇年となり、さらに年を加えられて、蔽いようのない社会の各方面における衰退を露呈している。これは、決して侵されてはならない基本的人権を、削ぎ落とし、歪め、改変して、全く別のものへとしようという、貧して鈍する圧力が増大する経過をも表現している。そのような中で、私たちのさまざまな領域における活動は、つねに著しい困難を強いられる。

二〇一二年の「自民党憲法草案」では、基本的人権の中でも中核的な、生命・自由・幸福追求の権利や、表現の自由などが「公益及び公の秩序」の制限下に置かれている。そしてこれは、改憲への危惧などではなく、すでにさまざまな方面で開始されているわけだ。

著者のアライ＝ヒロユキが主要なフィールドとしてきたのは、美術・文化批評の分野である。本紙読者の関心に近いところでは「天皇アート論」（社会評論社）で天皇を対象とした表現を論じているし、フランスの『シャルリー・エブド』事件の衝撃の中で開催され、多数の参加者を集めた「表現の不自由展」でも、アライは主催の一人として関わってきた。

だからもちろん、アート表現の問題もこの本の中では扱われている。しかし、この本の扱う領域、論じられている事件や事象の範囲はもっと広い。ここで扱われている問題は、そのほんのいくつかを抜き出しても、例えば、保育所と地域社会、生活保護への監視、「防犯」監視システム、海辺でのパーティや祭りの喧騒、地域での平和や戦争・憲法の催し、図書館の自由、メディアへの言論統制と報道の自由、歴史認識をめぐる「偏向」攻撃など、いずれも重要で、それにもかかわらずしばしば些細なことに見え、「一過性」の記憶とともに捨てられてしまいかねないテーマも多い。これらの忘れられてはならないことを拾い上げるということだけでも、それは大きな成果を生む。そして、著者はその一つひとつに向き合い、丁寧な分析と評価を刻んでおり、その視野の広さがこの本の重要なポイントとなっている。

この間、国家により警察や軍隊の物理力をむき出しにする制限や弾圧が拡大している。そして、同時に、自治体や企業、住民間のコンフリクトから起因する制限はいっそう拡大している。これらには、じつは国家による制限や弾圧を、利害当事者の争いに仮装するかたちで、実際の権力関係を隠す目的で仕組まれていると考えられるものも多い。本質が視えなくされる中で、「対立」が演出され、その操作的な「関係性」のなかで、強制力を有する存在が「手を汚さずに」、強制力による抑圧の根拠を示すこともなく目的を果たすという構造だ。これらの構造は、インターネット社会のSNSなどのツールを経由してより有効に機能している。もちろん、ヘイトグループや右翼団体などの物理力もこれに組み合わされ、さらにコミュニケーションは息苦しく、ときには耐え難いものとなっている。そこでは、暴力やヘイトが、自由な生のための表現と同列化される倒錯も日常化している。

「一見まったく異なる背景を持つ出来事が同じ時期に起こり、いわば行動を制約する重しのように社会に積み重なって」いる状況であり、「検閲、弾圧、規制、忖度、クレーム」など「いずれの言葉をもってしても事態を十分に説明するには事足りない」。著者のいう「NG社会」とは、このような社会状況を指している。「NG」とは「No Good」をつづめた表現の俗語で、よくない、ダメ、不可、不良品など、否定される対象へのラベリングである。それは、メディアの中で濫用される概念でもある。

紆余曲折があっても、マクロ的に見ると自由は拡大すると観念されてきたのが近代の成果だ。しかしそれがさまざまな方向から制限されようとし、そうした制限こそが新しく優れた社会的な共通認識であるとされてきている。「自由からの逃走」（フロム）が雪崩をうってはじまろうとしているのだ。

もとより、この状況に簡単な処方箋が書けるはずもない。しかし、このような事態だからこそ持続しなければならないことがある。著者は「数々の不正や不条理に対し、勇気をもって有害なものを投げつけること。言葉や表現、あるいは行動が含む有害なものを許容すること。そこから冷静に対話のための手段を採り、向き合うこと」を強調する。同意できる結論だろう。ものを見るとき、描かれなかったものに想いをいたすことに、意識的でありたいと思う。

（二二〇〇円）

太田昌国の夢は夜ひらく103

みたび

精神的な葛藤や模索の過程を欠く「紋切型」の言葉

一九八〇年代の半ば頃だったか、某紙のジャーナリストに「何かと言えば、第三世界、第三世界……という物言いに、私は最近ウンザリしてきているんです」と言われたことがある。私が「低開発国」ボリビアの映画集団ウカマウの、〈映像による帝国主義論〉というべき作品の何本目かを輸入し公開するので、試写会へ来てもらえないかと電話した時の答えが、それだった。私には心当たりがある。「日本の繁栄はアジアをはじめとする第三世界の貧困の上に築かれているということを忘れるわけにはいかない」――これは当時の〈第三世界主義者〉たちの「決まり文句」になり始めていた。「紋切型の言葉」は、いつも、発語する者の精神的な葛藤や模索の過程を欠いている。だから、虚しく響くことがある。私も何度か言っただろう。私自身がその物言いに違和感をおぼえ始めて、何とかしなければと考えていた頃だった。決め台詞を吐く以前に、もっと歴史的・論理的な展開をしなければならない、と。高度消費社会の只中で、ひとり覚めている感じの物言いもよくない。だから、私に限らず、この種の言論や集会をよく取材してくれていた彼女の、率直な言葉が胸に響いた。

同じ頃の次の挿話も覚えている。吉本隆明が、川久保玲のコム・デ・ギャルソンの〈高価な〉衣装をまとったモデルとして『アンアン』誌に登場した。それを埴谷雄高が次のように批判した。――「吾国の資本主義は、朝鮮戦争とヴェトナム戦争の血の上に『火事場泥棒』のボロ儲けを重ねに重ねたあげく、高度な技術と設備を整えて、つぎには、『ぶったくり商品』の『進出』によって『収奪』を積みあげに積みあげる高度成長なるもの」を遂げた。そして、「アメリカの世界核戦略のアジアにおける強力な支柱である吾国の『ぶったくり資本主義』のためにつくしているあなたのCM画像を眺めたタイの青年は、あなたを指して、『アメリカの仲間の日本の悪魔』と躊躇なくいうに違いありません」(『海燕』四巻四号、一九八五年、福武書店)。

埴谷が、「国内の現実に依拠」した論理によってではなく、突然のように第三世界＝タイの青年を持ち出して行なった吉本批判の在り方に危うさを感じた。私にとって思想的に最前線にいたはずの埴谷が、古めかしい〈社会主義者〉に見えた。吉本は独自のファッション論を展開した。「衣装のファッションの反対物は、すべての制服、画一的な事務服や作業服だ。ファッションが許されなかったあの戦争時代には、男性には二種類くらいの国民服が制定され、女性はモンペ姿が唯一の晴れ着であり、作業衣服であり、ふだん着だった。女性たちはわずかに生地の模様を変化させるくらいがファッション感覚の解放にあたっていた。統制と管理と、それにたいする絶対の服従が必要な権力にとっては、制服は服従の快い象徴にみえるし、ファッションはいわば秩序を乱す象徴として、いちばん忌み嫌われるものだった」(『アンアン』四四六号、一九八四年、マガジンハウス)。

ビートたけしがこの論争に介入し、ふたりを独特の方法で茶化した(筑紫哲也編集長時代の『朝日ジャーナル』誌上だったと思うが、いま手元にない。冴えていて、面白かった記憶だけが残っている)。埴谷―吉本論争は、ソ連体制が崩壊する六年前の一九八五年に展開された。これ以上の詳説や評価を行なう紙幅はないが、時代状況的にいってもいかにも示唆的なものを孕んでいた、と今にして思う。

韓国大法院が「徴用工」問題で日本企業に賠償を命じる判決を下して以降、植民地支配と侵略戦争をめぐる論議が日韓両国で改めて起こっている。このコラムでも繰り返し述べてきたが、二〇世紀末以降、植民地支配を「合法」としてきた従来の国際法解釈は、ヨーロッパ中心主義的偏向であるとして再審に付されている。植民地と被植民地の関係が非対称的であったことが問われているのである。日本政府、メディア、それに誘導された日本世論は、国際法の位置づけをめぐる捉え方の変化を認めず、「何を今さら」という反韓・感情論に流れるばかりである。しかも、安倍政権の持続が象徴するように、それを支える社会的な根っこは太く、根深い。私たちの議論が「決まり文句」や「紋切型」に終始せずに説得的なものであるためには、私たちもまた、その歴史観と論理性が問われていることを自覚したい。

(一月一二日記)

マスコミじゃけの天皇制 30

〈象徴天皇教〉とは何か？
――〈壊憲天皇明仁〉その28

天野恵一

『週刊文春』（1／17号）のトップのグラビアページは「最初で最後のアンコール」のタイトルで、天皇夫妻が新年一般参賀で手を振っている、おなじみのポーズの写真。次の見開き2ページはあふれかえる人波が示され「十五万人の奉祝」が示されている。「皇族方のお出ましは五回の予定だが、最後となる五回目が行われた後も、まだ多くの人が並んでいたため、予定外の六回目が行われた」。「平成最後の正月に天皇が見せられた〝粋なはからい〟だった」（傍点引用者）。

こういうトーンの記事が、全マスメディアにあふれかえっている。

中嶋啓明は『週刊金曜日』（1／11号）「『平和天皇』の内実」を、こう書き出している。

「年が明け、メディアは連日、さらに声高に『平成最後』を叫び続けている。／前回と異なり『喪』の時期を経ない今回の代替わりに向けた動きには、日本社会の民衆すべてに『祝賀』状況への参加を強制しながら進んでいる」。

「平成代替わり」の政治的性格は、ほぼ「奉祝一色の〈祝賀ナショナリズム〉が政府・マスコミが組んで上から組織されるもの（構造的には「強制」）であることはまちがいない。ただ、この一般参賀の風景が象徴するように、その「動員」はすこぶる自発的なものと人々には意識されている。そこで強調されている「最後」というイデオロギーも、次の新天皇の時代の「始まり」を前提としている。それは天皇（元号）替りという土俵での「時間支配」（天皇の歴史に自分たちの生活の歴史を自然に重ねて考えるようにしかけるシステムの作動）であるのだが、その政治作為を「強制」と認識できている人は、圧倒的に少ない。

いや、強制（政治的作為）を自発性と広く認識させるために〈祝賀ナショナリズム〉というお祭り騒ぎが、上（国家とマスメディア）から組織されているわけである。それは二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックの騒ぎまで予定に組み込んだ〈祝賀ナショナリズム〉づくりであり、安倍晋三政権は、この〈お祭りナショナリズム〉の大高揚にのせて「強いニッポン」を目指す「改憲」をあわよくば実現しようと狙っている。

昨年一二月二三日、私たち（反天連）は、明仁天皇の代になってから、その「誕生日」に繰り返してきた「天皇制の戦争責任・戦後責任を考える」集会を持った。おそらく三〇年間繰り返してきた私たちの集まりも、天皇代替わりで最後ということになる。一貫して問題提起者の一人として発言してきた私の最後のテーマは、〈天皇教〉という問題。

それは、天皇という生身の「ご本尊」の祭祀をテコに「万世一系」の「現人神」一族の〈天皇教〉が国家の中心に生き続けていることの政治的意味を問い続けることの重要さである。

もちろん、敗戦で「皇室祭祀令」は廃止された（一九四七年）、しかし皇室の〈私事〉として、宮城内の「神聖」なる施設（宮中三殿など）は、そのままで、天皇の皇室祭祀は、あたりまえのごとく続けられている。〈天皇教〉は人々の眼からは隠されている儀礼を媒介に生き続けている。天皇一族の「退位」そして「即位」の一連の儀式は、秋篠宮が「絶対やらねば」と力説した「大嘗祭」はもちろん、すべて〈天皇教〉の宗教儀式なのである。このことに、私たちは「昭和天皇Xデー」の政治プロセスで、はじめて強く自覚させられた。「代替わり」は憲法二〇条（政教分離原則）の下に戦後国家が成立していると見せるために、表からは一貫して隠されていた「皇室祭祀」を、支配者たちが公然化させざるをえない状況なのである。

象徴天皇は、〈天皇教〉の生身の「ご本尊」として祭祀の中心を生き、動き続けることで、実は〈政教分離原則〉を破壊し続けてきたのである。〈政教分離原則〉を貫徹させるためには、国家まるがかえ（皇族の私費とされる「内廷費」も、公金とされる「宮廷費」同様、私たちの税金（公金）から支払われているし、彼らの居住地もすべて国有地である）をやめる。この〈象徴天皇教〉一族を、当たり前の私たち同様の日本列島住民に〝解放〟してあげるしかあるまい。そこで祈ろうが祈るまいが彼らの勝手だ。

〈象徴天皇教〉の「ご本尊」は、「人柄」のいい護憲派リベラルだって!? フザケルンジャネー。

野次馬日誌

12月1日～12月31日

【12月1日】

明仁、美智子、徳仁、雅子、愛子◆愛子が、明仁、美智子に17歳の誕生日を迎えたあいさつをするため、皇居・御所を訪問。半蔵門を車で入る。これに先立ち東宮御所で、宮内庁長官や職員からの「祝賀」を徳仁、雅子と共に受ける。

美智子◆東京・池袋の東京芸術劇場で、南米ベネズエラで始まった、音楽を通じた教育プログラム「エル・システマ」のコンサートを鑑賞。

徳仁◆東京都新宿区のホテルで開かれた日本山岳会の講演会に出席し、作家夢枕獏らの登山話を聞く。

愛子◆17歳の誕生日。

秋篠宮大嘗祭発言◆公明党の山口那津男代表が、新天皇即位に伴う重要祭祀である大嘗祭への国費支出に疑問を示した秋篠宮の発言について「どういう経緯で、どういう発言をされたのか正確には分かりかねるので、コメントは控えたい」。

【12月3日】

秋篠宮大嘗祭発言◆宮内庁の西村泰彦次長が定例記者会見で、秋篠宮が天皇の代替わりに伴う重要祭祀「大嘗祭」への国費支出に疑問を示した上で「（宮内庁長官らが）話を聞く耳を持たなかった」と発言したことについて「閣議で了解された事項に反対をなさっているのではなく、宮内庁に対するご叱責と受け止めている」。発言は前回の代替わりの時からの持論で、明仁の退位が具体化する前から長官らに伝えていたと説明。

眞子婚約◆宮内庁の西村泰彦次長が定例記者会見で、秋篠宮が会見で、長女眞子と婚約が内定している小室圭に対し、金銭トラブルを念頭に「それ相応の対応をするべきだ」と発言したことについて、２０２０年までの結婚延期は現時点で変更ないとした。

【12月4日】

徳仁◆政府が、徳仁が新天皇に即位する翌年5月1日以降に、トランプ米大統領を「国賓」として日本に招く検討に入り、新天皇との会見や安倍晋三首相との首脳会談を行う方向で調整すると、政府関係者が明らかに。

代替わり◆徳仁が新天皇に即位する翌年5月1日と、「即位礼正殿の儀」が行われる10月22日を翌年に限って祝日とする特別法案が衆院本会議で、共産党を除く与野党の賛成多数により可決され、衆院を通過。

【12月5日】

明仁、美智子◆東京都千代田区の東京国際フォーラムを訪れ、社会保険労務士制度の創設50周年を記念した式典に出席。／東京都港区のサントリーホールで開かれた小澤征爾の記念コンサートを鑑賞。

【12月6日】

明仁、美智子◆東京都国立市にある知的障害者のための福祉施設「滝乃川学園」を訪問。学園の成人部を視察。

代替わり◆参院内閣委員会が、徳仁が新天皇に即位する翌年5月1日と、「即位礼正殿の儀」が行われる10月22日を翌年に限って祝日とする特別法案を、共産党を除く与野党の賛成多数で可決。

元号◆政府が翌年5月1日の新天皇即位に伴って改める新元号の公表時期を、4月1日以降とする方向で調整に入り、4月10日に明仁の即位30年を祝う式典が開催された後の、4月11日以降とする案が有力となっている。

「皇室外交」◆菅義偉・官房長官が記者会見で、ガーナのアクフォアド大統領が10～13日の日程で訪日すると発表。滞在中に明仁と会見すると報道。

【12月7日】

眞子◆千葉県市川市の宮内庁新浜鴨場で、駐日外国大使らに伝統のカモ猟を紹介する恒例行事に接待役として参加。

代替わり◆政府が閣議で、新天皇が即位する翌年5月1日を一回限りの祝日とする特別法に関し、4月27日からの10連休を全ての「国民」に求めたものではないとの答弁書を決定。自由党の山本太郎議員が質問主意書で祝日法の「こぞって祝う」との文言を踏まえ「祝日法は、全国民に同じ行動を求めているとの理解で良いか」とただしたのに答えたもので、答弁書で「祝日法の『こぞって』の文言を根拠として、休日とすることを全国民に求めているものではない。当該期間を休日とすることを推奨するものではない」。

新年一般参賀◆宮内庁が、新年一般参賀を翌年1月2日に皇居で実施すると発表。明仁、美智子は午前と午後の計5回、宮殿の長和殿ベランダに出て、徳仁、雅子や秋篠宮、紀子ら成年皇族が一緒に並ぶと報道。宮内庁は多くの人に加わってもらうためとして、天皇誕生日（12月23日）の一般参賀から参賀者の滞留対策を強化し、東庭に大型スクリーン2台を設置し、明仁らの様子を映し出す方針。

「海づくり大会」◆秋田県が、秋田市などで開かれる２０１９年の全国豊かな海づくり大会の日程が9月7、8日に決まったと発表。

【12月8日】

代替わり◆徳仁が新天皇に即位する翌年5月1日と、「即位礼正殿の儀」が行われる10月22日を来年に限って祝日とする特別法が参院本会議で成立。

【12月9日】

天皇、皇族◆明仁、美智子が東宮御所を訪れ、徳仁、雅子、愛子と共に夕食。明仁、美智子、雅子◆雅子が55歳の誕生日を迎え、明仁、美智子にあいさつするため皇居・御所を訪問。半蔵門から入る。

徳仁、雅子、愛子◆徳仁が東京・目白の「学習院創立百周年記念会館」で開かれた学習院ＯＢ管弦楽団の定期演奏会に出演。雅子が2階席で、愛子が1階席で鑑賞。

雅子◆55歳の誕生日を迎え、宮内庁東宮職を通じて発表した文書による感想で、翌春の代替わり後の日々を見据え「国民の幸せのために力を尽くしていけるよう、

研さんを積みながら努めてまいりたい」と述べたと報道。

皇居◆1日に始まった恒例の皇居・乾通りの一般公開が終了。明仁、美智子が期間中、訪れた人たちの様子を庁舎から眺めたというと報道。

【12月11日】

明仁◆皇居・御所で、訪日したガーナのアクフォアド大統領と会見。代替わり◆2019年に開かれる新天皇の「即位の礼」に参列する外国元首らの接遇費用として、19年度予算に51億円が計上される見通しになり、国内外の賓客を招く「饗宴の儀」の簡素化が決まり、概算要求の85億3千万円を大幅に減額した。

【12月12日】

秋篠宮、紀子◆バンコク着の民間機でタイ入り。

大山古墳◆宮内庁が仁徳天皇陵に指定する日本最大の前方後円墳・大山古墳（堺市、5世紀中ごろ）で、築造当初の墳丘が今より約40メートル長い約520メートルだったことが同庁の調査で判明。

靖国神社◆東京都千代田区九段北3丁目にある靖国神社の神門前で、段ボールが燃えるぼやがある。警視庁公安部が、神社の敷地内に無断で立ち入ったとして、建造物侵入容疑で中国人男女2人を逮捕。

【12月13日】

秋篠宮、紀子◆秋篠宮がタイ東北部のマハサラカム大を訪れ、名誉博士号の授与式に参加。同大の理事会議長から学位記を受け取り「私1人に授かったというよりも、協力してくださった日本・タイ両国の多くの方々の尽力を顕彰したものだと思う」とスピーチ。学内にある養蚕技術と薬効キノコの研究施設を視察し、空路でバンコクに移動。紀子が、バンコクで母子手帳国際会議の開会式に出席。

久子◆東京・四谷にある在日韓国大使館の文化交流施設「韓国文化院」を訪れ、名誉総裁を務める高円宮記念日韓交流基金の顕彰式典に出席。

宮内庁職員文化祭◆宮内庁職員組合の文化祭が庁舎内で始まり、職員らの書道や絵画などと共に、明仁、美智子や皇太子一家ら皇室の作品が展示される。

「明治の日」◆憲法公布を記念した11月3日の「文化の日」は明治天皇の誕生日にも当たるとして、「明治の日」への名称変更を目指す自民党の議員連盟（古屋圭司会長）が、党内閣第1部会と合同勉強会を開き、祝日法「改正」に向けた条文案を提示。

【12月14日】

明仁、美智子◆東京都渋谷区の新国立劇場で、近松門左衛門の代表作をフラメンコで表現した舞台公演「Ay曽根崎心中」を鑑賞。鑑賞終了後、公演者らと懇談。

秋篠宮、紀子◆秋篠宮がタイ北部のナレスワン大を訪れ、ニワトリの美しさや鳴き声などを競う品評会を視察し、闘鶏を見学。別行動の紀子が、バンコクにある子ども病院や、タイ語に翻訳された日本の児童書を所蔵する図書館を視察。

「皇室外交」◆菅義偉・官房長官が記者会見で、ザンビアのルング大統領が17～20日の日程で訪日すると発表。滞在中に明仁と会見すると報道。

【12月15日】

秋篠宮、紀子◆「私的」に訪れていたタイから羽田着の民間機で帰国。

【12月16日】

改元◆新元号の公表時期を巡り、仮に徳仁が翌年5月1日の新天皇即位後に改元の政令を公布した場合、1日中の施行は困難で、改元は翌2日にずれ込むとの見解を政府がまとめたことが分かる。即位後の公布を主張する自民党保守派にこの見解を伝えたと、関係者が明らかに。

【12月17日】

明仁、徳仁◆明仁が、安倍晋三首相や閣僚、副大臣らを皇居・宮殿に招き、小食堂「連翠」で年末恒例の昼食会を催す。昼食に先立ち行われた懇談で、明仁「国民のために日夜、国務に精励されてきたことを、深く感謝しております」。徳仁が同席。

代替わり◆宮内庁の西村泰彦次長が定例記者会見で、代替わり後に新天皇、皇后が地方訪問で新幹線などに乗る際は、現在の明仁、美智子と同様に、全車両を貸し切りにした臨時専用列車を利用すると明らかに。徳仁、雅子は現在、一般客が乗る通常ダイヤの列車の一部を貸し切りにして移動し、国内の航空機も一般客と同乗しているが、代替わり後は明仁、美智子と同様に臨時の特別機を利用する方向で検討している一方、秋篠宮は皇位継承順1位の「皇嗣」となった後も、現在の徳仁と同じ待遇にはせず、基本的には現状の移動方法を維持し、宮内庁によると、新幹線や国内の航空機を利用する際は、職員らの必要な座席だけを確保する方針で、外国訪問の際は、新天皇、皇后も、皇嗣となる秋篠宮も政府専用機を使うとみられると報道。

宮中昼食会◆安倍晋三首相が、皇居での宮中昼食会に出席。

【12月19日】

明仁◆訪日したザンビアのルング大統領を皇居・御所に招き会見。宮内庁によると、23日に85歳の誕生日を迎える明仁に対し、大統領が「日本と世界の人々を平和に導くために尽力されてきたことに心から敬意を表します」と述べると、明仁が「戦争や災害を体験し、平和の重要性を強く感じながら育ってきました」と応じたと報道。

代替わり◆天皇代替わりに伴う儀式や祭祀の細部を詰める宮内庁の「大礼委員会」が第3回会合を開き、皇位継承の重要祭祀「大嘗祭」の会場として皇居・東御苑に建設する大嘗宮について、前回の代替わり時から敷地面積を2割強縮小することなどを決める。主要な建物となる悠紀殿と主基殿は前回と同規模になるが、屋根材を変更し、一部建物も規模を縮小したり、プレハブにしたりすると報道。

【12月20日】

美智子◆東京都中央区の浜離宮朝日ホールを訪れ、縁がある「きりく・ハンドベルアンサンブル」のクリスマスコンサートを鑑賞。

代替わり◆徳仁の新天皇への即位に伴って翌年4月27日から5月6日まで10連休となることを受け、厚生労働省が、都道

府県を通じて期間中の医療提供に関する調査を行うと明らかに。

「下問」◆河野太郎外相が、天皇誕生日を前に東京都の飯倉公館で開いた祝賀レセプションで、各国に派遣する大使らの認証を明仁から受ける際の様子を披露し「国会と違い、ご下問（質問）は30分間、質問通告なしで答えないといけない。手に汗をかきながら答えている」。「一度どうしても答えられないご下問があり、陛下に『調べて出直してまいります』と申し上げたことがあった」

【12月21日】

明仁◆宮内庁が、明仁が翌年1月有効期限の運転免許証を更新せず、23日に85歳の誕生日を迎えるのを機に車の運転をやめると明らかに。

代替わり◆政府が、翌年の新天皇即位に伴う一連の行事・儀式の費用として、計144億円を盛り込んだ2019年度予算案を閣議決定。18年度予算に計上された即位関連費や20年度予算などに盛り込む費用を含め総額166億円となる見込みで、「平成」の即位関連費（1990年度）と比べて約3割増額。宮内庁が、代替わりに伴う側近部局の組織改編を盛り込み、退位後の明仁、美智子を支える上皇職は65人、徳仁の即位後、一家に仕える新たな侍従職は75人、秋篠宮一家の皇嗣職は51人に増やす方針で、「即位礼正殿の儀」などの内閣府計上分は、18年度予算などを含め36億円、19年度予算案では、儀式後に行われるパレード「祝賀御列の儀」で使うオープンカーの購入費として8千万円を盛り込む。海外からの賓客の滞在関係費として外務省は50億円、警備関連費で、警察庁が38億円をそれぞれ計上。宮内庁が19年度予算案で、即位儀式関係費に25億円を計上、「大嘗祭」の費用は、国費に当たる宮廷費として18億円を盛り込んだため、18年度予算などを含めると大嘗祭関係費は総額27億円となり、前回に比べ4億円増える。宮内庁分の即位関連の費用は、18年度予算などを含め計38億円。宮内庁の19年度予算案の総額は240億円になり、新天皇一家が住む皇居・御所の改修費として7億円や、秋篠宮邸の改修費の一部2億円も盛り込むなど、宮邸全体の改修費は総額33億円。

改元◆立憲民主党の枝野幸男代表が記者会見で、新元号を事前公表して「国民生活」への影響を回避することを前提条件として、改元政令の公布自体は翌年5月1日の新天皇即位後でも容認できるとの認識を表明。

皇室維持策◆大島理森・衆院議長が福岡市で講演し、翌年春の皇位継承以降の安定的な皇室維持について、「女性宮家」創設も含めて政府と国会で検討していくよう提起。

五輪予算◆2020年東京五輪・パラリンピック組織委員会と東京都が、最新の予算計画の第3版を公表。

【12月23日】

明仁◆85歳の誕生日を迎え、これに先立ち20日、皇居・宮殿で記者会見し「天皇としての旅を終えようとしている今、象徴としての私の立場を受け入れ、支え続けてくれた多くの国民に衷心より感謝する」。約4カ月後の退位の日まで「憲法で象徴と位置付けられた天皇の望ましい在り方を求めながら、日々の務めを行っていきたい」と訴えたほか、「平成が戦争のない時代として終わろうとしていることに、心から安堵している」と述べたと報道。

天皇、皇族◆明仁の誕生日を祝う一般参賀が皇居で行われる。明仁が美智子や徳仁、雅子らと共に宮殿・長和殿のベランダに立つ。秋篠宮、紀子や眞子、佳子も。宮殿や御所で祝賀行事が続き、徳仁、雅子ら皇族や宮内庁幹部が明仁と美智子にそれぞれ「祝い」を述べる。安倍晋三首相ら三権の長による祝賀、皇族や首相、国会議員らが集う祝宴、各国駐日大使らを招いての茶会などが催される。愛子と悠仁が「祝い」を伝えに御所を訪問。徳仁、雅子や秋篠宮、紀子、黒田清子夫妻が御所に集まり、共に夕食。

明仁誕生日◆安倍晋三首相が、皇居で行なわれた「天皇誕生日祝賀の儀」、妻と共に「宴会の儀」に出席。／ロシア大統領府が、プーチン大統領が明仁に電報を送り、誕生日の「祝い」と新年に向けたあいさつを伝えたと発表。

【12月24日】

法王◆前田枢機卿によると、日本では「大嘗祭」の中心儀式が翌年11月14日から2日間にわたり催されることから、その後の訪日を法王は考えているといい、新天皇や首相と面会するため東京も訪ねる意向と報道。

【12月25日】

明仁、美智子◆宮内庁が、明仁にせきを伴う風邪の症状があり、午前の宮中祭祀「大正天皇例祭」への出席を控えたと発表。午後、皇居・御所での「公務」は予定通り行い、内閣から送付された閣議で決まった文書に署名や押印をする「執務」を行う。美智子の微熱が続いていると報道。

秋篠宮◆「大嘗祭」を巡り、秋篠宮が宮内庁に、宗教色が強いとして国費支出への反対意見を伝えた際、会場となる大嘗宮を新たに建てず、皇居・宮中三殿にある神嘉殿を利用して費用を抑え、「内廷費」で賄う案を示していたことが、宮内庁関係者への取材で分かる。明仁の退位の意向が明らかになった2016年に宮内庁トップだった風岡典之・前長官に国費支出への反対意見を伝え、神嘉殿での開催を提案したのに対し、宮内庁が、神嘉殿では敷地が狭く、大嘗宮を建てられないため大嘗祭の開催は難しいとして、秋篠宮に、この考えを伝えたと報道。

代替わり◆政府が、皇位継承に伴う翌年4月末からの10連休で「国民生活」に支障が出る事態を避けるためとして関係省庁連絡会議を開き、政府一丸で対策に万全を期す方針を確認。

歌会始◆宮内庁が、翌年1月16日に皇居・宮殿で開かれる「歌会始の儀」で、歌が詠み上げられる一般の入選者10人を発表。

【12月26日】

皇居◆宮内庁が、新年に皇居・宮殿や御所に飾るための盆栽「春飾り」の仕上げ作業を、報道陣に公開。

集会の「真相」

「元号反対署名」を提出してきましたよ！

二〇一八年一二月五日。天気は快晴。そう、その日は二〇一八年二月に始まった「元号いらない署名」の提出日だったのだ。集まった署名は実に六八〇三筆。目標は五〇〇〇筆だったから、その壁を越られたのは（残念ながら取りこぼしはあると思うけれど）非常に良かった。

午後一時前に第一衆議院議員会館前に到着すると、先に来ていた人の周りに警官が何人かいて何事かと思ったら「この場所から移動しろ」と警察が難癖をつけていたのだった。移動の理由を聞いても「行け」としか言わない。明白な理由無も説明も無しで排除かよ……！と、暫く抗議したが目的は署名の提出なので、警察は許せないが移動をしてあげた。

第二衆議院議員会館前に移動し、気持ちを新たに集まった二〇人の仲間で「元号はいらないぞ！」「天皇の代替わり反対！」「天皇制はいらない！」等々、熱いシュプレをあげ、更に〝謎の覆面バンド・おっちんズ〟が、この署名運動の主題歌とも言える「元号やめよう」の歌を冬空に響き渡らせた。参加した仲間も「元号やめよう今すぐやめよう♪」とコーラスする。続く「役所・学校・警察・銀行、ホントは誰も使いたくない♪」の歌詞に、周りにいる警察も遠くで監視していた公安の連中もどう思ったか。歌いながら快感だった。歌のあとは、集まった皆が「元号反対」や「天皇制反対」について熱い熱いアピールを行った。最後に〝おっちんズ〟の新曲「天皇制はいらないよ」という天皇制をダイレクトに批判する歌が披露され、署名を提出する為に内閣府へと移動した。事前申請していた九名と、当日申請して認められた一名の計一〇名が中へ入り、人数を指定してきた割には狭い部屋で請願受付係の檀原さんと対面した。

机の上にミニ日の丸が立っていたので「思想信条に反する」と、仲間の一人が倒し、檀原さんは「あ、はぁ」と目を白黒させていた。着席したあと、「新元号は決まったのか」「誰がどう決定するのか」等々問うと、「まだ決まっていない」「決定するのは極少数（自分は関わっていない）」と答えていた。また「国は国民に元号を強制していない」と言うので、役所や学校では「強制されている。拒否したら卒業証書を出さないと脅す学校もある」と具体例を出すと急に元気が無くなった。

終わって出てようとしたら「現状復帰を」と、倒したミニ日の丸を指したが、「思想信条に反する」と誰も手を付けず、またもや目を白黒させていた。

因みにこちら側の主張は「書面にして署名と一緒に官邸に届けます」と言っていたけれど、彼は一切メモを取っていなかった。官僚ってどんだけ頭良いんですかね。

（元号はいらない署名運動／大橋にゃお子）

『ブラックボランティア』著者本間龍さんを迎えて

一二月七日、文京シビックセンター・シルバーホールで、「オリンピック災害」おことわり連絡会（おことわリンク）主催の学習講演会「『ブラックボランティア』著者　本間龍さんを迎えて」が行われた。本間さんのネームバリューの割には、宣伝期間が短かったためか、参加者は五〇名ほど。

本間さんは話題になった『ブラックボランティア』（角川新書、本紙昨年一〇月号に、おことわリンクの「暗黒聖闘士」さんの書評あり）の著者で、今回の２０２０東京オリンピックにおけるボランティア問題について「果敢に切り込んでいる」方。同書では「国、ＪＯＣ、電通、メディアがスクラムを組んで国民をブラックボランティに扇動し、反対しにくい空気を作るのは、先の大戦時のような、悪しき全体主義というべきである」と書かれている。

東京で開催されるオリンピックでは、一一万人ものボランティア（大会ボランティア八万、都市ボランティア三万）が募集されている。年末には一八万人の応募があったと報じられた。だが、予算三兆円がつぎ込まれる一大商業イベントであるにもかかわらず、アルバイトではなく労働の対価なしの無償ボランティア（日当一〇〇〇円、交通費、宿泊費は自腹）をあてこんでいるのは「アマチュアリズムを装った労働詐欺」だと本間さんは言う。

多くの大学では、ボランティア動員の片棒を担いで、この時期にある前期試験を繰り上げたり、特別に単位を与えるとか、就活にも有利だとか……。おことわリンクでは、これはまさに国策イベントに対する「学徒動員」の構造ではないかと捉え、国大協や私大協などに対する申し入れなども行なってきた。

当日の本間さんの講演は、同書で展開されていたような内容を軸として、金を落とすシステムとしてのオリンピックの構造、企業の協賛と電通の仕切り、オリンピックボランティアの業務内容、オリンピック組織委員会の「ボランティア戦略」についてなど、多岐にわたった。とくに、ロンドン五輪などとも比較して、ボランティアの健康（命）の責任を持つべき部署が実質的に不在であること、ボランティアへの報酬どころか、オリンピックを主催する側は「ボランティアは育成するのに金がかかる」とさえ考えていることなどが指摘された。

酷暑のオリンピックは「インパール作戦」になぞらえて語られるが、それは人間を無償の資源として使い捨て、そのために全社会的に国策への動員を果たしていこうという指向性においても、大日本帝国と同じだなあ、と改めて感じた。

（北野誉）

絵が語るハンセン病―隔離政策、優生思想、天皇制

女性と天皇制研究会では「女天研講座特別編」として福岡から蔵座江美さんをお招きし、お話をうかがった。蔵座さんは「ヒューマンライツふくおか」の理事で、国内最大のハンセン病療養所「菊池恵楓園」入所者の絵画作品の保存・研究・展示活動に携わっておられる（詳しくはAlert二〇一七年一〇月号、「ふぇみん」二〇一八年三月五日号）。講座では、蔵座さんが熊本市現代美術館学芸員としてハンセン病元患者に出会ったきっかけや、企画された数々の展覧会の様子、画家たちのエピソードなどをお話しいただいたあと、後半はじっくりと約三〇点の作品のスライドを見せてくださった。一生帰ることのなかった故郷を描いた絵、堕胎させられた赤ちゃんを描いた絵、色鮮やかな作品が静かに鋭く語りかけてくる。

参加者とのディスカッションでは、作品の保存管理の現状や、作品との向き合い方について、さらにはこれらの絵画を「美術」「アート」として展示し、価値判断することの困難などが議論された。

その後、女天研から、為政者の人権侵害を覆い隠して見えなくする皇室の役割や優生思想について問題提起をおこなった。貞明皇后はハンセン病患者の支援者ということになっているし、明仁は全国すべてのハンセン病療養所入所者との懇談を果たした（ことになっている）らしい。だが本当は、与えているのは天皇たちではなく、慈悲深い皇室というイメージ作りに利用された元患者たちの方だ。

一二月一五日土曜日の夜、文京区シビックセンター。参加者三一名。ハンセン病の問題に関心のある人、アートに関心のある人、優生思想に関心のある人、そしてもちろん天皇制に関心のある人など、いろんな人たちが集まり、昨年春に奄美で開催された「ふるさと、奄美に帰る」展（国立療養所菊池恵楓園金陽会作品展）の図録が完売する盛況だった。

（女性と天皇制研究会／松井きみ子）

退位・即位問題を考える練馬の会～『明治一五〇年』近代天皇制国家を問う

「アキヒト退位・ナルヒト即位問題を考える練馬の会」では、結成一周年にあたって「『明治一五〇年』近代天皇制国家を問う」と題して、太田昌国さんによる講演と討論の集会を開催した。

太田さんは、まず金静美「東アジアにおける王政の廃絶について」をひきながら、二〇世紀初頭に相次いで倒れた中国（清国）・大韓帝国・帝政ロシアという三つの王政と、生き残った日本の天皇制を対比させ、世界史的な観点から天皇制を把握することへの注意を喚起した。引き続き、英国のインドから中国への植民化の進行、メキシコ戦争を経て大西洋から太平洋に至る領土を得た米国、南下を開始していたロシアなど、膨張する帝国主義の時代の中でアジアへの侵略政策を選択し国家形成をしていった、新興帝国主義国家としての大日本帝国の問題について述べられていった。

「万国公法」を掲げて、半未開、未開国を支配して収奪する欧米「文明国」に倣い、日本は、そのイデオローグであった吉田松陰らの構想をなぞりつつ、欧米との交渉で失ったものを、蝦夷地、琉球を手はじめとする東アジアの植民地化の進行によって奪回するという戦略を取った。この植民地主義の歴史は、厳しく批判し否定しなければならないが、そのためには、侵略されたアイヌら少数民族の歴史をいわゆる「被抑圧史観」で捉えるだけでなく、それぞれの民族が有していた歴史と可能性を、これらの事実のなかで躍動的に認識することが重要だと強調された。

いま、こうした植民地主義を臆面もなく正当化し、これを批判する立場を「自虐史観」とする勢力が圧倒的になっている。一九四五年の敗戦処理から学ぶべきことは、日米安保条約と天皇制の問題とともに、「戦後の平和主義」がアジアへの植民地支配の結果を総括しておらず、「戦後」のアジアにおける戦争状況をも無視しているということであり、それをこそ考えねばならない。朝鮮半島の問題においても、日本帝国主義の歴史への責任の認識を、いまなお欠いた発言が支配している。それは、左派やリベラルの敗北の結果でもあった。だからこそ今後も、安易な結論を求めず、この現実に主体的に真剣に向き合っていかねばならない、と結ばれた。参加者は三七名。

「練馬の会」としては、これまで六回の集会・学習集会を行なってきたが、二月からもほぼ二カ月ごとに練馬で集会を重ねていく予定だ。多くの参加を呼びかけたい。

（蝙蝠）

反天連討論集会 Alert !!!～「代替わり」状況へ

一二月二三日。GHQはアキヒト誕生日のこの日にあえてA級戦犯を処刑する。アキヒト即位後三〇年間、反天連は毎年この日に「天皇制の戦争責任・戦後責任」をテーマに集会を開催してきた。

今回、小倉利丸さんを迎え、討論集会を日本キリスト教会館で行った。小倉さんは、劣化する近代の価値とグローバルな極右の台頭のなかでの天皇制を、憲法自体の問題、排外主義を江戸までさかのぼり、視点は世界規模で分析する。特殊だと思われている天皇制が、世界で台頭する極右の世界観、価値観と共通すると指摘。最後に伝統と文化の問題についての議論が必要で、それをどういうふうに根底から否定するのかが今の時代に必要なのではと締め括った。桜井大子は、五つのポイントから、裕仁、明仁と徳仁を比較整理し、徳仁天皇で天皇制がどのように変わるか探る。メディアをフルに活用し、皇室の自律・自立を当然の権利として主張しはじめた世代。今後、天皇尊重、君民一体思想がさらに強化されていく可能性が高いと予測。

北野誉は、「即位・大嘗祭」について秋

篠宮発言から二つの問題をあぶり出す。天皇制が果たしている役割は天皇教という一つの宗教として考えるべき。象徴天皇制と政教分離は基本的に矛盾する。憲法それ自体がはらむ矛盾についても問い直すことも意識的にやるべきだと発言。

最後に天野恵一は、三〇年前の「代替わり」と比較。本島長崎市長銃撃事件を取り上げ、大衆から噴出する天皇の戦争責任問題を消去していくことが、支配者たちの最大のテーマであった。現代それが成功しかかっている状況であるという。そして、わだつみ会の声明にも触れ、アキヒトの護憲発言の欺瞞をキチンと批判したものであり、そこからいろいろな闘争が始まったが、今、アキヒト即位の始まりにあった問題を、一から考え直さなければいけないと問題提起した。

リベラル派といわれる学者たちが、情けないほど次々と天皇になびいていく。

そのなかにあって、今回の「代替わり」で私たちが何を問題にし、反対の声をあげていかなければいけないか、確信がもてた集まりだったと思う。参加者九六人。継続は力なり。報告を書きながら私はこの言葉を噛み締めた。

（桃色鱈）

反天日誌

12月5日（金）●元号いらない署名提出行動（集会報告参照）

12月7日（金）●2020オリンピックボランティア動員？おかしいぞ！本間龍さんを迎えて　学習講演会（集会報告参照）

12月10日（月）●即位・大嘗祭違憲訴訟提訴

12月12日（水）●警視庁機動隊の沖縄派遣は違法住民訴訟口頭弁論

12月15日（土）●女天研講座特別編　ハンセン病元患者が残した絵から見えてくるもの（集会報告参照）

●労働運動つぶしの大弾圧を許さない！東京緊急集会

12月16日（日）●止めよう！東海第二原発首都圏連絡会集中討論集会

12月21日（金）●「明治150年」近代天皇制国家を問う（集会報告参照）

12月23日（日）●Alert!「代替わり」状況へ―反天連討論集会（集会報告参照）

1月5日（土）●おことわりリンク学習会「スポーツとジェンダー・セクシュアリティ」

集会情報 INFORMATION

開催中～2月17日●日本人「慰安婦」の沈黙

13時～18時（月・火・休日休館）／WAM・女たちの戦争と平和資料館（地下鉄早稲田駅ほか）／連絡先：同館（03-3202-4633）

1月19日（土）●警視庁機動隊の沖縄派遣は違法　住民訴訟集会

17時40分開場／文京区民センター3A（地下鉄春日駅ほか）／阿部岳・三宅俊司／主催：警視庁機動隊の沖縄への派遣中止を求める住民監査請求実行委員会（juminkansaseikyu@gmail.com）

1月20日（日）●「平成」代替わりの政治を問う・連続講座第9回　象徴天皇制の戦争責任・戦後責任

14時30分開場／ピープルズ・プラン研究所（地下鉄江戸川橋駅ほか）／伊藤晃、千本秀樹、天野恵一／主催：同研究所（03-6424-5748）

1月27日（日）●映画と講演「日米地位協定と沖縄」

10時～映画・13時～講演／八王子市北野市民センター（京王線北野駅ほか）／前泊博盛／主催：横田行動実行委員会（042-525-9036 立川自衛隊監視テント村）

●誰のためのスポーツなのか～市民参加への道～

13時開場／小石川運動場2F会議室（都営地下鉄飯田橋駅ほか）／谷口源太郎／主催：「オリンピック災害」おことわり連絡会（080-5052-0270）

1月30日（水）●地方自治の砦「国・地方係争処理委員会」に訴える総務省ヒューマンチェーン

16時30分～／総務省前（地下鉄霞ヶ関駅）／主催：「止めよう！辺野古埋立て」国会包囲実行委員会（090-3910-4140 沖縄・一坪反戦地主会関東ブロック）

2月2日（土）●大杉栄「自叙伝・日本脱出記」第4回

18時～／シビル3F（JR立川駅）／加藤晴康／主催：シビル（042-524-9014）

●東京朝鮮高校生「無償化」裁判東京集会

18時40分～／武蔵野公会堂ホール（JRほか吉祥寺駅）／主催：東京朝鮮高校生の裁判を支援する会ほか（080-3930-4971）

2月11日（日）●天皇「代替わり」に反対する2・11行動

13時15分開場・集会後デモ／在日韓国YMCA9F（JR水道橋駅ほか）／菱木政晴／主催：同実行委員会（090-3438-0263）

●マスコミじかけの天皇制～代替わりと大衆天皇制のゆくえ

14時～・集会後デモ／在日韓国YMCA地下ホール（JR水道橋駅ほか）／天野恵一／主催：2・11東京集会実行委員会

2月16日（土）●即位・大嘗祭違憲訴訟提訴報告集会

13時30分開場／文京区民センター2A（地下鉄春日駅ほか）／即位・大嘗祭違憲訴訟の会（sokudai@mail.zhizhi.net）

●なぜ人々はヘイト本を買うのか!?

14時～／日本キリスト教会館（地下鉄早稲田駅ほか）／倉橋耕平／主催：差別・排外主義に反対する連絡会

2月24日（日）●天皇在位30年記念式典反対デモ

13時集合／ニュー新橋ビル地下ホール（JR新橋駅ほか）／主催：終わりにしよう天皇制！「代替わり」反対ネットワーク（090-3438-0263）

……神田川

●何とかできた。今年もよろしく～。